

はじめに一訳者から

トマス・チャンピオンは16世紀から17世紀にかけてのイギリスで活動した詩人であり、同時に、作曲家である。

ここには彼の2つの論文、*Observation in the Art of English Poesie* 及び *A New Way of Making Fowre Parts in Counter-point* を訳出した。前者は直訳すれば「英詩の技巧に関する所見」、後者は「四声部対位法の新しい作り方」ということになるだろうか。それでもいいのだが、簡潔を旨とする立場から、それぞれ「英詩韻律論」および「四声部対位法論」とした。どちらも論文というより啓蒙的な技術書と言った方が適当かもしれない。

チャンピオンの作詞・作曲になる歌を聴くと、過度に情緒に流れることなく、理知的で、感覚的で、そしてしばしば諧謔的であって、これらの論文に通じるものが感じられる。そこには時代に即しながら時代に流されまいとする強い意志のようなものも感じられる。

チャンピオンが生きた時代は、イギリス史上でも稀に見る混乱期であった。英仏100年戦争、バラ戦争を経て疲弊したイギリスにあって、ヘンリー八世がローマ・カトリックから離脱したのは個人的な、あるいは政治的な事情からであって、宗教的な必然性があったわけではなかった。次のメアリー女王はカトリックに回帰し、次のエリザベス女王は再び英国国教に戻った。そのたびに多数の殉教者を出し、さらに清教徒が勢力を増すに及んで、イギリスは混迷を極めた。

チャンピオンは詩論においても作曲論においても、過去の詩や音楽に強い愛情と執着を示しながら、それでもなんとか新しい時代に即した理論を打ち立てようと苦悩している。それはこの時代の時代精神そのものだと言ってよい。シェイクスピアがこの時代の申し子であったのと同じ意味で、チャンピオンもまたこの時代の申し子であった。そのことを伝えることがこの翻訳の主旨である。

チャンピオンは詩論においても音楽論においても、実作者の立場から論を組み立てており、必ずしも論理的であるとは言えない。特に詩論では、当時のイギリスにおけるラテン詩の第一人者として、ラテン詩の韻律法を模範として英詩の「あるべき姿」を論じており、そこには根本的な無理がある。原則的にラテン語のアクセントは音節の長短を基としており、英語のアクセントは音節の強弱を基としていて、両者は基本的に相容れない。その上、そこには日本語におけるような高低のアクセントが密接に関わってきて、「論理」をますます複雑なものにしている。そこには詩に音楽をつける詩人兼作曲家としての立場なり経験なりがあるのであろう。つまり、音符は長短であり、同時に高低であるのであって、そこが詩とうまく折り合わなければならない。折り合っていない歌曲が世の中に多すぎる、というのが、恐らく、彼がこの詩論を書いた本音であろう。

チャンピオンはこの論文の中で脚韻の習慣を激しく非難している。それに対してサミュエル・ダニエルが「脚韻の擁護」(1603?)を書いて真っ向から反論し、世間はダニエルの方に好意を示した。チャンピオン自身も詩を書くときは(この論文に出てくる詩は別として)

原則として脚韻を用いたのだから、彼の主張が世間に受け入れられなかったのは当然である。彼が言いたかったのは、脚韻はいわば言葉の遊びであって、詩の本質に重要に関わるものではないということであり、さらに彼の真意を探れば、脚韻は詩に曲を付けるときには何の働きもしない、ということだったのだろう。全体を読めば脚韻に関する部分は決して論の中心的関心事でないことが明らかなが、世間はその部分だけに関心を寄せて、拒否反応を示したのである。

この中でチャンピオンは詩の実例としておよそ 40 編の自作の詩を披露している。彼はここで作曲という束縛から解放されて、のびのびと詩だけの世界を楽しんでいるかに見える。これらの詩を読むことが、ここでの最大の楽しみと言えるだろう。

対位法論は、一本の旋律に他の 3 つの声部をつけて 4 声部の合唱曲・合奏曲を作る方法を説いたものである。それは素人には難解なことのように見えるが、チャンピオンは初心者であってもそれができる方法を披歴している。確かに、音程についての基礎的な知識さえあれば、この方法によって誰でもソプラノ・アルト・テナー・バスから成る曲を作ることができる（但し、1 本の旋律があれば）。

このように、なるほど導入部分は簡単で魅力的だが、進むにつれて話は難解になって、初心者には荷が重くなる。それでも「対位法について」の部分だけでも一読することは価値のあることだろう。

但し、ここでも問題になるのは、チャンピオンが新しい方法を模索しながら、古い考え方への執着を捨てきれないことである。彼は古代以来の 4 音音階、中世以来の 6 音音階から話を説き起こしている。それは 7 音音階によって音楽を理解している者にはひどく面倒に感じられることで、しかもこの導入部分がなくても本論の論旨を理解するには何の妨げにもならないのである。事実、1671 年に出版されたクリストファー・シンプソンによる改訂版 (*The Art of Descant: or Composing Musick in Parts* と題されている) では、この部分は省略されている。

それでもこの論文がおよそ 100 年にわたって作曲の教科書として用いられたことを思えば、先の詩論とは違って、本論が社会に広く受け入れられたことが理解される。

チャンピオンその人については、拙文「評伝トマス・チャンピオン」をお読みいただきたい。

なお、翻訳にあたって、主としてデイヴィス (Walter R. Davis) の *The Works of Thomas Campion* をテキストとして用い、補助的にヴィヴィアン (Percival Vivian) の *The Works of Thomas Campion*、およびブレン (A.H. Bullen) の *Thomas Campion* を用いた。

(入江和生)

参考文献

- Auden, W.H., *Selected Songs of Thomas Campion* (Boston: Godine, 1973).
- Blom, Eric, ed., *Everyman's Dictionary of Music* (London: Dent, 1971).
- Bullen, A.H., *Thomas Campion* (London: Sidgwick & Jackson, 1903).
- Bullen, A.H., *Elizabethans* (New York: Russell & Russell, 1962).
- Davis, Walter R., *The Works of Thomas Campion* (London: Faber & Faber, 1969).
- Hart, Joan, *Ayres & Observations* (Cheshire: Carcanet Press, 1976).
- Lindley, David, *Thomas Campion* (Leiden: E.J.Brill, 1986).
- Lowbury, E., Salter, T., Young, A., *Thomas Campion, Poet, Composer, Physician* (London: Chatto & Windus, 1970).
- MacDonagh, Thomas, *Thomas Campion and the Art of English Poetry* (New York: Russell & Russell, 1973).
- Ratcliffe, Stephen, *Campion on Song* (Boston: Routledge & Kegan Paul, 1981).
- Simpson, Christopher, ed., *The Art of Descant: or Composing Musick in Parts* (1671)
- Smith, G. Gregory, ed., *Elizabethan Critical Essays* (London: Oxford Univ. Press, 1904)
- Vivian, Percival, *The Works of Thomas Campion* (London: Oxford Univ. Press, 1909).